

## 第2回「清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学」(9/19開催) モニター参加者レポート

### 第2回 柳津町レポート

岩波友紀

「連続オープンディスカッション 奥会津の周り方」の三島町の第1回目に参加させていただき、今回は2回目の柳津町に参加させていただきました。三島町では地域文化を守って歴史文化基本構想についてという、わりと想像しやすいテーマでしたが、今回の柳津町の題目は「清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学」。なかなか題名だけではどんなテーマなのか想像がつかない。地域学を「いろいろな人の眼」から見て見ると、いろんな視点に気づくのだろうかと思いがそそられました。

斎藤清美術館学芸員の伊藤さんの「やないづの家宝展」のお話では、普通の民家に眠っている「家宝」を、そのエピソードとともに展示するという企画の取り組みでした。美術館、博物館はなかなか一般の人の生活からはかけ離れた存在であることが多いと感じます。このような地域の宝を展示するなどの活動は、足元の地域の住民が美術館を自分たちの身近に感じることができるのではと思いました。また、自分たちが価値を感じていないものが実は他の人から見れば価値があることなどを気付ける魅力的な企画だと思いました。「よそ者の目」で奥会津を描いた斎藤清がよそ者であるからこそ気づけた奥会津の魅力のように、この企画でも外部からきた大学生が関わることが重要な点ではないかと感じました。昔から柳津に住み続けている人では気づけなかったような価値が、これを機会に見出しているのかもしれない。私は会津に移住してくる前に、空き家をたくさん見せてもらいました。もう住人がなくなり物もそのまま残っている古民家には、外部の私から見れば「お宝」のようなものがたくさんありました。モノ自身の価値だけでなく、その家の歴史、地域の歴史、生きてきた人間の歴史が怨念のように凝縮されたモノばかり。こういうものを無限に保存し続けることは不可能と思いつつも、処分されていく前になんとかならないものかを感じたことを思い出しました。個人や家という小さな単位の歴史の重要さを感じられたり、そこから大きな歴史を見られるような企画ではないかと思えます。

農家の金子さんのお話では、滝谷川のお話が記憶に残りました。金子さんは農薬や化学肥料を一切使わない自然栽培をしているとのことでした。自然栽培をする理由のひとつに、そこで穫れる農産物だけのためでなく、農薬が川から下流に流れて他の人に迷惑をかけたくない、ということをお話されていました。1つだけ、1カ所だけ何かをすれば良いのではなく、自然はすべてつながっていてサイクルにもなっている、そのことを再認識できるようなお話でした。今度ぜひお茶を飲み、ティールームへ伺いたいと思いました。

県立博物館の大里さんは、主に「藁」の文化のお話でした。ニンギョウマンギョウという稀有な藁人形行事も興味深いですが、やはり近年の効率化で藁の入手が難しくなっていることも同時に興味深かったです。以前、三島町のサイノカミでも藁を入手するのが困難とお聞きしたことがあったので、同じ状況なのだと思います。民俗行事を続けることはいろいろ

ろな意味で難しい時代ですが、材料入手が難しいというのもひとつの大きな要因だと想像できます。機械化が進んでいない時代には有り余るほどの藁があり、それを農業を含む生活の祈りの手段に使われたのも当然なことであるし、しかしそうすると、生活の中で自然に藁が確保できない現代において、その昔から続く民俗行事はどのような意味があるのだろうか。そのようなことも思ってしまいました。

題名からはあまり想像できなかった今回の柳津町のテーマは、私なりに「小さなそれぞれ視点から大きなものを見る」ことではないかなと勝手に解釈しました。個々の家の宝から見えてくるもの、自然栽培から見えてくるもの、藁から見えてくるもの。別のものを見ている、その先に見えてくるものは共通している感じがします。奥会津でどのようなことが大切なのか、これから大切にしていかなければいけないのか。小さな視点、例えば私の個人的な視点でも重要になるのかな、と思えるような今回のオープンディスカッションでした。

「地域の人が苦勞している雪景色を描いて申し訳ない」、という伊藤さんがお話ししてくれた斎藤清の言葉。斎藤清と同じく「よそ者」であり、写真で表現する者にとって、この言葉に強烈に同感できます。私が感じる会津の魅力の大半は雪景色。でもここの人たちにとって雪は邪魔者でしかない。雪に限らず他のことも同じです。それでも、同じものを違う視点から見ることは大切だし、目に見えるものだけでなくその奥にある見えない本質を見ていくことが大切だと、改めて思わせてくれました。